

◆特集「3・11を迎えてーミネロスタッフの3年目の想い」

あれから2年が過ぎた2013年の3・11。ミネロスタッフに今の心境や将来のことを聞いてみました。
毎日明るく元気に働いておりますが、その胸の内には様々な想いがあります。
皆様にも少しでも感じて頂ければと思い、今回は特集号といたしました。

「一生懸命」 飯館村／田中一正

かつて私が飯館村で生活していた頃は犬の散歩道で散歩を忘れて野イチゴを摘んだこと、季節の草花を愛でること、バカデカイ猪や野兎と遭遇して驚いたこと、イタズラ狸を追いかけまわしたこと、毎日毎日が新鮮で愉快でした。しかし愉快的毎日だけではあるはずもなく、大雨が降りカップを着て砂利道を直したこと、大雪が降りかじかんだ手を息で温めながら除雪したこと、炎天下の中草刈りしたこと、壊れたれた電牧を一日中直してまわったこと、明日収穫しようと思っていたじゃがいもをイノシシに全部荒らされたこと、山のように大変なことも多々ありましたがどれもこれもあの頃が一番充実し、幸せであった、そう思います。

思い起こせば30歳の時、一大決心をして飯館村に入植して牧場を立ち上げ、楽しい事、辛い事、様々な努力、経験をして40歳を過ぎいよいよ牧場も軌道に乗ってきたところでしたが、2011年3月11日、全てが無に帰ってしまいました。その日をもって10年間苦労して作り上げてきたものが無色無臭の化学物質によって崩れ去っていきました。搾った牛乳を自らの手で廃棄し、牛がやせ細っていく様を目の当たりにする日々、連日の余震、これからの人生の不安いや今日明日の生活、今までの人生で一番辛く混沌とした時期でした。

その後避難指示によって全ての牛を処分し飯館村の牧場を離れましたが酪農からは離れることはできませんでした。むしろ逃げる気がなかったという方が正確な表現だと思います。避難に当たり私は約半数ものかわいがっていた牛達を屠殺処分しました。私の都合で飼養されそして私が避難するという都合でその命を奪ったのです。すべて人間の身勝手な都合の犠牲にあったのです。そういう経験が私を前へ前へと押しやるのです。正直、立ち止まって一服したいと思う時もあるのですがもう一人の自分が背中を押すのです。まだまだこれからだ、立ち止まっている場合ではない、と。飯館村を離れた後も県南地方西郷村で他地域の避難牛の飼養管理をしたり、縁があって山形の牧場に勤めたりしました。そして満を持してミネロファームで働くことになったのです。結局新卒以降一度も牛から離れることはありませんでした。

私がミネロファームで働きたいと思ったのはまず新たな人と牛との共存関係の構築、そして福島県酪農の復興の一端を担いたいと思ったからです。入植したあの日、福島に骨を埋める覚悟で酪農を始めました。その思いは今も変わりません。そして約10年の歳月お世話になった福島県酪農に恩返しができ、人と牛が互いに共存繁栄しうる場所こそミネロファームだと思い、人生二度目の一大決心をしたのです。

震災後2年目を迎え、間違いなく後ろ向きではなく、前向きに酪農に向き合う自分を感じています。福島県酪農が完全復興した暁にはまたもう一度自分の牧場をもちたいという大きな目標もあります。その夢と福島県酪農の復興に向けまだまだ苦労や困難が待ち受けると思いますがこれからも飯館村にいた頃同様、一生懸命頑張っていきたいと思います。

「牛がいる生活」 浪江町／今野美智雄

東日本大震災と原発事故から二年が過ぎました。
あの日も普段どおりに牛の乳搾りをして普段どおりの生活をしていました。
そして二年が過ぎた今、ミネロファームでの普段どおりの生活があります。
昨年8月からミネロファームで働き始めました。
牛がいない牛舎からのスタートでした。牛を受け入れるための準備に忙しい日々を経て、北海道からの初妊牛の導入、そして分娩を迎え、乳搾りが開始したのです。

久しぶりに牛たちの匂いや温もりを感じ、嬉しさがこみあげました。
我が家は私が産まれてすぐに酪農を始めました。私の人生は常に牛と共にありました。

子供の頃から牛がいる生活が当たり前だったのです。
そんな普段どおりの生活があの日一変しました。
避難先の福島市から毎日毎日牛舎に通い牛の世話をする生活が始まりました。
そして5月19日牛舎から牛がいなくなりました。二本松市にある牧場に津島地区の酪農家の牛を避難させたのです。

その日から7月上旬まで避難牛の世話をし、最終的には県内の酪農家に引き取られていきました。家族も同然だった牛たちを手放すのは身を引き裂かれる思いでしたが、新しい環境でもどうか元気でいてほしいと願いながら送り出しました。そして牛がいない生活が始まりました。

牛がいない生活が普段どおりの生活になろうとしている時、ミネロファームで働いてみないかと声がかかりました。

そしてまた牛がいる生活が普段どおりになったのです。
家族にはいろいろ迷惑や心配をかけていると思います。

「牛が好きなんですよ。」「牛が生きがいなんですよ。」そういうふうに言ってくれる妻と娘とお義母さんと三匹のワンコ達に感謝しながら、今の私にとって普段どおりの生活をしていこうと思います。

「東日本大震災そして」 飯館村／長谷川義宗

東日本大震災そして、原発事故から二年がたち三年目を迎えて今思うことは、なにひとつ状況は変わっていないとつくづく思う。そしてその現実焦りを感じる。

放射能汚染によって家を出され避難し現在、山形県にお世話になっているがもう飯館には戻れない・・・自分では戻らないと決めているのにこれから住む場所も決まっていない。でも、まだ原発がどうなるかわからない状況はいまだに変わっていないのだから判断が難しい。

避難によって家業を失い、今はミネロで働いているが飯館で家族経営していた頃よりも収入は落ちてしまった。自分のわがままで山形の牧場からミネロに移り、やりたいことをやらせてもらっているが、家族にも苦勞をかけてしまっている。

自分の牧場を持ちたいという目標もあるが、最近の飼料高騰やTPPの問題などもあり、本当に新規で牧場を始めることがいいのかどうかも迷い始めている。でも、自分の年齢から考えても、迷っている時間はそんなにない・・・。

これから住む場所を探し、住む家を探し、そして、可能ならば牧場も建てたい。そうすれば、その土地も探さなくてはならない。そう考えると、避難したときと何にも変わっていないと思う。いつになったら離れ離れの家族と一緒に暮らせるのだろうか・・・。

そんな状況の中でも、避難によって自分にプラスになることがあったのも事実としてある。いろいろな人との出会いや、今までできなかった経験などさまざまなことがプラスになった。

家業の酪農を始める前は調理師をしていて、高校も電子科卒。酪農とはまったく関係ないところに就職したため、酪農関係の学校も出ていないし実習もしていない。それでも今回の避難で山形の牧場にお世話になり、ミネロで働き、いろいろな経験をさせてもらった。家に居たときより少しはレベルアップしたと思う。

それと、普通では会うことのないような人との出会いもたくさんあった。そういう人たちと話をし、いろいろな知識や知恵を教えてもらった。人のやさしさや温かさ、家族の大切さをしみじみ感じた。家族やそういった人たちに背中を押されここまで進んで来れたような気がする。

しかし、こういう自分にプラスになることがあったとはいえ、何ひとつ原発問題が解決していない現状もあるのです・・・。

周りを見れば、避難生活に慣れ、放射能に慣れ、今の生活が普通になってきているような気がするが、それでは駄目なんです！今が普通じゃないんだから！！

もう三年目に入り、焦りばかりが先にたち何一つ進んではないが、自分を信じ、家族を信じ、そして仲間を信じ、前向きに悩んで歩んでいきたい。いつ歩むか？今でしょ！

「あの日から2回目の3・11」 浪江町／紺野 宏

今、「3・11」を通して自分はどのように変わっただろうか。

23.3.11 午後2時46分 遅い昼ごはんを食べた後にBS1で「篤姫」の再放送を両親と視ていた。ドラマが佳境に入ろうとしたときに事態が一変した。遠い地鳴りで地震が来ることを察知したが、あれ程の物とは考えもつかなかった。余りの揺れに母は買ったばかりのプラズマテレビに走り寄り押さえ、父は食堂の食器棚を押さえ、私は出口を確保しようと戸を開けていった。いつまでも続く揺れ。事の重大さは、時間の経過と共に母の手の下で現実となっていった。

12日以降、心休まることの出来ない余震と原発の水素爆発の続く中で、牛の世話と集会所に避難してきた町民の世話。15日出された町独自の避難指示。全町民の一斉避難。私はどうすればいいのか、どう判断すればいいのか、わからず目の前のことの対応に右に左に走り回っていた。

24.3.11午後2時46分 2月末に急死した父親の葬式を3月4日出して、一息つく間も無く酪農ヘルパーと配送の業務に追い立てられて迎えた。直前までは、時間になったら手を止めてわが身を振り返ろうと思っていたが、時間が過ぎた頃に気がついた。震災以降感じている「妙に足が地面についていないような浮遊感」というか、日常生活を送っているのだけれど、どこか演じているような自分」を感じながらの毎日。どう表現したらいいのかわからないが、それが本音かな。

それでも、少しでも忙しく働いていることで気がまぎれるような気がした。ただ、これまで経験したことのない通勤に加え車と信号機の多さ、人の多さには疲れた。それに、朝4時起床と一日最低200kmの車の運転は、視力・体力、財布力を衰えさせた。

25.3.11 あえてこの日を選んで、午前中に私の担当している行政区の組長会を持った。出席した住民から何か特別な想いが出てくるのではないかと思ったのだが、それぞれの安否情報のやり取りが忙しそうだった。1時半に牧場に戻り昼休みを取っているうちにテレビから東京で行われている追悼式の模様が流れてきた。今回は、震災発生時刻を心静かに待つことが出来た。

相変わらず、あの「地面に足がついていない」ような浮遊感は変わらない。いつまでも「俺の生きる場所は、ここではない。」などと、「駄々ワラシ」のような気持ちでいる。多くの避難民が、先の事を考え始めているのを横目で見ているのが今の実態だ。帰れるあても目途も立たない、立てられないでいる国の政策でも、心の片隅でホンの少し期待している自分がいる。

2年前の避難指示以降の3ヵ月間の自分の行動は、いまだに記録として整理がついていない。「今日、私がここにいることの原点なのだから、忘れないうちに」と、わかっていながら延び延びになっている。「思い立ったが吉日。明日にでも手をつけようか」。